# 心に残る場所

## ――学長室と恩頼堂――

田頭穂積

十年ひと昔。武田ミキ学長に初めてお目にかかったのは、本学の講師として辞令をいただいた昭和五十八年四月

一日のことでした。その年は、本学がさらに飛躍していく節目の年にあたり、武田学園創立三十五周年の記念式典が盛大に挙行された年でもあります。昭和五十六年に文学部初等教育学科は開設されていましたので、歴史的にみますと、本学の充実・発展期のレールがすでに敷かれてから奉職させていただいたことになります。学長八十一歳。当時は、とてもお元気な御様子でした。わら草履ばきの姿で、私の研究室があった「別館」と称する初等教育学科教育棟の方へも、かくしゃくと足を運んでおられました。あれから、まる十年の月日が瞬く間に過ぎ去ってしまいました。

思い出は不思議なものです。日頃は忙しさのなかで気づかずにいるのに、その場所に立つと、人物や出来事が鮮やかによみがえってくるものです。学長のお姿がまざまざと思い出される場所が二つあります。私にとって特に忘れられない場所です。それは、文学部棟二階の学長室と、学長が住まわれていた家の隣にある恩頼堂です。

まずは、学長室。そこは、年に一、二回、学長と各学科の先生方が一同に会して学長懇談会を行うところでもありました。そこも、やはり初めてお会いした日の印象が大きく残っています。それまでの私の勤務先は福山にありました。福山は、学長ゆかりの地です。それで、前任校の先生からのことづけをもって学長室を訪れたのです。ノックして部屋に入ると、いつものように奥まった机のところで仕事をしておられました。やや離れた位置から物を言い出しますと、学長はメガネ越しにご覧になり、机のところまで来るようにおっしゃって、気さくに話かけてくださいました。その時、ふと机に目をやると天板の端が大きくいたんでいたのです。退室まぎわに「何か足りない物があれば遠慮なく申し出てください」と言われたのですが、実は私の研究室の机にも具合の悪い箇所があるとも言えずに、苦笑したことがありました。学長ともあろう方がこんな机でという、ある種の驚きを覚えました。学長は、

確かに物を大事にされる方でした。その日は、教育方針についてはいっさい触れられなかったのですが、後年、学長室は、学長が朝早くから夜遅くまで仕事をされる執務室であり、しかも教員や学生に教育への情熱を発信される基地でもあることがわかります。

もう一つは、恩頼堂です。赴任して二年目の文教祭での出来事でした。時は十月下旬。今でもそうですが、文教祭の一大イベントであるファイアーセレモニーは、近隣の女子大学では行われていない名物行事の一つです。当時、私は学生部の厚生補導委員会に属しており、学生部の他の先生方を見習いながら、学友会の大学祭実行委員会のメンバーとともに立派な文教祭にしようと努めていました。学長から早々に「ファイヤーに使った枕木は、最後まで燃え尽くすように」というお達しがありました。そのとき私は正直にいって「これはえらいことになったぞ」と思い、寒い中、明け方まで火の守をする姿が思い浮かびました。ところが、前日に学長から「是非、恩頼堂に泊まってください」という温かいお言葉があったのです。案の定、ファイヤーが終わる夜九時頃は、まだ残り火が赤々と燃え続けています。キャンパスの見回りを一通り終え、担当者一同恩頼堂にいったん帰ってみますと、学長お一人で自ら数名分の布団を敷き終えようとされているところでした。学長は「お手伝いできることは、こんなことぐらいですよ」と謙虚に言われ、手伝わせようとされないものですから、一同恐縮の至りでした。そして、「文教のおふくろさんですけぇーの。」と言いつつ帰って行かれました。教員一同、学長に夜具を整えてもらったのは、後にも先にも私たちだけであろうと感激したものでした。その夜は幾度となく残り火の確認に出向いたのですが、澄みきった空には無数の星がまたたいていました。翌朝には味噌汁が出ました。そのとき、本学の家族的雰囲気は、このようなところからも醸成されてくるのではないかと思ったものでした。

学長は、物だけを大事にされる方ではなく、人をもっと大事にされる方でした。私たち教員も学生を大切にしなければならないことを、身をもって教えられたように思います。これまでに本学で学んだ武田ミキ前学長の「心の教育」の教えは、私達の大きな財産になっていくことでしょう。ご冥福を、心からお祈り申し上げます。